

復活祭から聖霊降臨節までの7週間は奇妙な時期だ。十字架という最も暗い底から復活が起こり、驚くべき光を放っているが、弟子たちは死にこだわったまま(ルカ 24:36~38)。

彼らがしっかり目覚めるには、聖霊降臨を待たねばならない。今日その前に、昇天するイエスと、見送る使徒に注目したい。

復活したイエスは、生前のように弟子を教え(使徒 1:3)、共に食事をし(1:4)、使命を与え(1:8)、その後天へ昇った(1:9)。そして「イエスが離れ去って行かれるとき、彼らは天を見つめていた(1:10)」。使徒たちは呆然とイエスの昇天を見送っていた。彼らの様子は二人の天使の言葉からも分かる。

「ガリラヤの人たち、なぜ天を見上げて立っているのか。～あなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになる(1:11)」。

要するに使徒たちが「さようなら先生、もう会えません」と惜別に浸っていると、天使は「いつまで天を見とるんじゃ、イエスは再びやって来る」、と叱る調子でたしなめている。

すぐ傍らに聖なる天使が現われているのに、使徒たちはポカンと口を開けて空を見上げたまま。何だかクスッと笑える。

二人の天使は震え上がるほど神聖な存在なのに(ルカ 24:4~5)、使徒たちはまるで気づかず、聖なるものを無視して空を仰いでいる。アイロニーを込めて読むと滑稽でさえある。

その口調はともかく、天使は「ガリラヤの人たち(1:11)」と呼びかけた。ガリラヤの、田舎っぼい、無学な若者たちが、聖霊の力を受けて「エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また地の果てに至るまで、わたし(イエス)の証人となる(1:8)」。

これらの記述は、聖霊降臨節の出来事と呼応している(2:7~8)。興味深いのは、ローカルなものがグローバルであること。

近年、注目され始めた共棲の論理も「ローカルにしてグローバル」。支配者の言語や作法に統一されることではなく、訛りを含んだ固有の言語や習俗が、多様な文化として並列されることこそ、真にグローバル(地球的)なのだ。

「使徒たちは〔オリーブ畑〕と呼ばれる山からエルサレムに戻って来た(1:12)」。彼らは「オリーブ山」でイエスの昇天を見送った。そしてここは、イエスが苦しみもだえて祈り、十字架を決意された場でもあった(ルカ 22:42~44)。

十字架前夜、イエスは「いつものように」オリーブ山に行く(22:39)と弟子は従い、「いつもの場所」に来た(22:40)。エルサレム丘陵の東側にあるオリーブ山には、イエスの面影がくっきり刻まれている。この「いつもの場所」は、キリスト者にとっての出発点だ(使徒 1:12)。

私たちが証人の一人として(1:8)、「ガリラヤの人たち(1:11)」と呼びかける声を聞く。八ヶ岳伝道所(キリストの体)に属するローカルな者として、私たちの「オリーブ山」で呼びかけられている。

この「いつもの場所」で、昇天する栄光のキリストを仰ぎ見、現実に根ざした教えと十字架を思い起こす。

私たちが「いつもの場所」に集められるのは、キリストに捉えられているから。弟子たちは元より、悪霊憑きや病者、徴税人や女たちは愛と赦しを与えられ、心に押し込められていたものを露わにした。

キリストによって自己は解き放たれ、命が表出する。創造された私たちの命は、十字架で死守され、復活で永遠に保障される。昇天を仰ぎ見る「いつもの場所」には、栄光の復活と共に十字架の面影が。



#### 《おまけのひとこと》

「場の気」のようなものにこだわることはない だが軽んじてはいない 場に応じて心身の変調を感じることがあるから これは気のせいかな風か ただ聖霊の吹き方はなんびとにも規定されえない